



Title	日本語の数量詞が指示性を持つ条件
Author(s)	張, 琴琴
Citation	言語科学研究, 2, 1-11
Issue Date	2025-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/112797
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94319
Type	journal article
File Information	2_03_CH0.pdf



日本語の数量詞が指示性を持つ条件

張 琴琴

1. はじめに

本論は、加藤（2003）が提唱した既定的単位と未定的単位という概念を用いて、数量詞がどのような条件下で指示性を持つかを議論したものである。周知の通り、本来数量詞は単独で指示性を持つことができない。「3人の留学生」のように指し示す対象や文脈のような情報を与えてから初めてその指示性を持つようになる。例えば、「リンゴを何個買ったの？」という質問に対し、「5個買った。」と答える場合、前の文脈から「5個」が「リンゴ」を指し示していることがわかる。また、数量詞の指示は文脈によって変化することがあり、同一の数量詞であっても（1）と（2）のように異なる状況や対象により意味が異なる場合がある。

- (1) 3体の雪だるまを作った。
- (2) 雪だるまを3体作った。

本論では、上記のような連体修飾構文および連用修飾構文における数量詞を対象とする。そして、加藤（2003）で提案されている既定的単位と未定的単位という概念を援用し、数量詞の指示性について考察する。さらに、数量詞の前に指示詞（この・その・あの）を付加する際の指示性解釈の違いを検討する。

2. 数量詞の指示性とは

議論を進めるにあたり、予め本稿における指示性の定義を説明する。日本語の指示性に関する記述は主に名詞を中心としたものであり、数量詞に関する言及はほとんど見当たらない。名詞の指示性問題に関して、話し手と聞き手の両者が同時に関わっているということについて、福田（2016）、庵（2019）などによって明らかになっている。この結果から、数量詞の指示性を考える際に、話し手のみならず聞き手の解釈にも注目する必要があることが示唆される。

- (3) ヒッラ周辺で多数の市民の死傷者が出た模様で、AFP 通信は現地の情報として 33人が死亡したと報じた。¹
- (4) …、兵庫県警は、同県明石市内の市立中学3年の男子生徒（15）を殺人未遂容疑で逮捕し、女子生徒も共犯として逮捕したと15日、発表した。2人は同じ中学の生徒で、…

¹ 本論に取り上げる用例について、出典を明記していない用例は筆者による作例であり、また、引用した例文の下線はそのまま残すことにしたが、それ以外の下線は筆者によるものである。そして、例文番号は本論の通し番号に変更する。以下、同様である。さらに、「[?]」は非文とは言い切れないが、少し不自然な文であることを表し、「[?]」の数が増えるほど不自然になることを表す。

(いずれも岩田 2013 : 128)

岩田 (2013) では、(3) の数量詞「33 人」は先行文脈の指示物から一部を不特定なものとして取り出しているだけで、代名詞に置き換えもできず、代名詞的用法ではないと指摘している。これに対し、(4) の「2 人」は「男子生徒・女子生徒」を追跡することができるため、代名詞的用法であると判断される。数量詞の情報はもちろん、(4) の例文に現れる主題標識「(2 人)」は」からも名詞の指示特性を判断することができると考えられる。なお、主題と名詞の指示性については福田 (2016 : 167-184) を参照されたい。

また、数量詞の代名詞的用法について、岩田 (2013 : 127) では、照応表現であれ、直示表現であれ、指示物そのものの代わりに用いられるものが代名詞であるから、指示物そのものを表す名詞によって、置き換え可能なものと考えたと述べている。例えば、(5) の最初の「二人」は「あなたたち」に置き換えられ、二つ目の「二人」は「彼ら」に置き換えられる。

(5) (女性→聞き手二人への発話)

「待って！！」「二人には言わなかったけど、バイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようにお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」

(続いて、女性 → バイマーへの発話)

「バイマーさん、今度は二人を手伝って！！」

(マスタ)

(岩田 2013 : 126-127)

このことから、岩田 (2013 : 127) は、数量詞代名詞的用法を「先行文脈に既出である、または現場に参加している指示物を数量詞が追跡する用法で、数量詞を、代名詞もしくは指示物そのものを表す名詞に置き換えることが可能なもの」と定義している。本稿は、この定義が数量詞の指示性を議論する際にも有用であると考え、援用することにする。しかし、数量詞の指示性は必ずしも指示物そのものを表す名詞に置き換えられるとは限らない。例えば、以下の例である。

(6) 私のタルトを 3 切れ盗んだのは誰だ？

(『アリスイン・ワンダー・ランド』)

(7) 中国語演習を履修している学生が 3 人しかいません。全員留学生で、韓国人のソアさんとジアさん、シンガポール人のワンさんです。

(6) はタルトがいくつあるかが不明であるため、「3 切れ」で指示対象を追跡するのが難しい。(7) の「3 人」は後続文により具体的な指示対象を推定でき、指示性が明確である。これらから数量詞の指示性を次のように定義する。

(8) 数量詞の指示性の定義

数量詞を通じて前後の文脈における指示対象物を指示（追跡）し、その対象物の特定の数量や範囲を指し示すことができる。また、聞き手と話し手が同時にその数量情報を認知しない限り、会話としては成立しにくくなり、そうなると、語用論的な文脈が求められることになる。

このように定義することで、従来注目されてこなかった数量詞が、実際には名詞と同様に指示性を有することを説明できるようになる。また、この定義は数量詞の指示機能について議論する

際にも適用可能であると考えられる。なお、指示機能に関する詳細な議論については、別稿において改めて取り上げたい。

3. 先行研究と問題の所在

従来の日本語研究においては、名詞の指示性や指示詞の指示的用法に関する議論が盛んに行われてきた。しかし、数量詞は名詞の一種であるにもかかわらず、その指示性についてはほとんど注目されていなかった。先行研究を概観すると、数量詞の指示物追跡用法や代名詞的用法に関する研究が指示性を議論するには有用である。そのため、以下から関連する先行研究を整理し、その中に存在する問題点を指摘する。

3.1 岩田一成 (2005、2006、2013)²

岩田 (2013) は、先行研究を踏まえた上で数量詞の代名詞的用法について分析を行っている。数量詞代名詞的用法は、聞き手が受け取った情報から指示物を追跡するという間接性によって、直接指示する代名詞の使い難さを避けることと主張している。例えば、(9) の数量詞「二人」が「あなた」の持つ違和感を回避することから、数量詞代名詞的用法は間接的な指示物追跡として機能していると判断できる。また、(10) のように、現場に存在する指示物を数量詞代名詞的用法が追跡する対象として扱っている。

- (9) (職場の同僚「真仁田さんと松島さん」に町でばったり会ったとき)
「(?あなた／真仁田さんと松島さん／二人) がこんなところにいるなんて珍しいですね」
(岩田 2013 : 142)

- (10) (女性 → 聞き手二人への発話)
「待って!!」 「二人には言わなかったけど、バイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」
(続いて、女性→バイマーへの発話)
「バイマーさん、今後は二人を手伝って!!」 (岩田 2013 : 126-127)

以上の例文からわかるように、岩田 (2013) は数量詞が連体修飾であるか連用修飾であるかを区別せずに取り扱っている。

3.2 建石始 (2009)

建石 (2009) は、非指示的名詞句 (西山 2003) という概念を用いて、数詞「一」の独自性や非指示的名詞句に生じる理由を考察した上で、「N+の++助数詞」と「一+助数詞++の+N」の基本的意味および特徴の違いを分析している。

- (11) その上、自分の身銭を切って、あの夜、神木たちが呼んだ芸者の一人を呼んで貰った。
三十五歳の夏代という芸者だった。 (建石 2009 : 53)

² 岩田 (2005、2006) をもとに加筆修正を加えたものが岩田 (2013) 『日本語数量詞の諸相：数量詞は数を表すコトバか』に収録されている。本論では主に最新の知見が加えられた岩田 (2013) を参考にした。

- (12) チョコレートにダイエット効果があるというのは {一つの噂／ただの噂／単なる噂} だよ。
(建石 2009 : 55)

建石 (2009) によると、(11) の「一人」は「芸者」の中の一人という意味で、部分数を表す。つまり、その一人は特定されていないということである。(12) の「一つの噂」は述語名詞句に当てはまるものが主語名詞句以外にも存在しており、主語名詞句はあくまでその一部分であることを明示しているのである。また、(13) のように、同じ文において、「N+の+-+助数詞」と「+-+助数詞+の+N」の両方が使用でき、大きな意味の差がないと指摘されている (建石 2009 : 54-55)。

- (13) 考えてみれば恐怖だって {財産のひとつ／ひとつの財産} である。恐怖を感じないから偉い、感じるから駄目と一面的に断定できる種類のものではないのだ。
(建石 2009 : 54)

さらに、(14) の「N+のなかの+数量詞」や (15) の「数詞+N+の+数量詞」のように、名詞句の段階で部分を表すものにすれば、「一」以外の数詞も非指示的名詞句³に生じることが可能であると指摘している (建石 2009 : 54)。

- (14) グッチとシャネルは人気ブランドの中の二つである。
(15) ガンと脳卒中は三大成人病の二つである。
(建石 2009 : 54)

実は、指示性の観点からこの2形式を見ると、(14) (15) の「二つ」はそれぞれ「グッチとシャネル」、「ガンと脳卒中」を指し示しているため、指示性を持っていると言える。

3.3 坂本智香 (2016)

坂本 (2016) は、「一つ+の+NP」と「NP+の+一つ」という二つの形式の前に連体修飾成分を付加することによって、両形式の特徴の違いを議論したものである。結論として、「[NP+の+一つ]は聞き手の発話解釈に対してNPを限定的に解釈するよう指示する機能を担っているのに対し、「一つ+の+NP」は非限定的に解釈するよう指示する機能を担っている」と主張している (坂本 2016 : 59-60)。

- (16) 雪平夏美に会えたことはこの作品がもたらした {一つの奇跡／奇跡の一つ} だと思っています。

³ 建石 (2009 : 54) によれば、「N+の+-+助数詞」は同格を表しにくく、部分を表しやすいという特徴がある。同格を表すものは数量詞が代名詞のように機能し、その対象をNで詳しく述べるものであるという性質上、指示的名詞句にしか生じない。一方で、同格を表しにくい「N+の+-+助数詞」は名詞句の段階で部分を表すため、主語名詞句が述語名詞句の一部であるという属性を表しやすく、非指示的名詞句に生じることが可能である。この観点から、確かに (14) を非指示的名詞句と判断することができる。しかし、(15) の「三大成人病の二つ」はそもそも「数詞+N+の+数量詞」という構造となっていないため、非指示的名詞句であるか否かは検討の余地があると思われる。

(17) 雪平夏美に会えたことは〇 {一つの奇跡／?? 奇跡の一つ} だと思っています。

(坂本 2016 : 57)

坂本によれば、「この作品がもたらした一つの奇跡」の連体修飾成分は限定ではなく情報付加の機能を担い、「一つ+の+NP」という形式は聞き手の発話解釈においてNPを非限定的に解釈するよう指示する機能を持つ。一方で、「この作品がもたらした奇跡の一つ」の連体修飾成分はNPに対して限定的機能を担っており、「NP+の+一つ」という形式は聞き手の発話解釈においてNPを限定的に解釈するよう指示する機能を持っている。

3.4 問題の所在

数量詞の代名詞的用法については、岩田 (2013) が最も詳細な議論を行っていると言える。本論で検討する「指示性」という概念も、岩田の研究から多くの示唆を得ている。しかしながら、岩田の議論にはいくつかの問題点が存在することも指摘される。まず一つ目に、数量詞が照応的用法を持つことが指摘されているものの、その詳細な説明が不足している点である。二つ目に、挙げられている事例の中に理解を混乱させるものが含まれている。例えば、「私には慧生と嬌生という二人の娘がいます。その二人は中国と日本の血が流れています。私は日本に帰ってこの二人の娘をしっかりと育てていこうと決意しました。(岩田 2013 : 138)」という例について、岩田は「その二人」が家族に対する数量詞代名詞的用法の例であると主張している。しかし、なぜ「二人」の前に「その」を付けなければならないか、また「二人」が3回連続で登場することにおける意味上の違いや、「その二人」と「この二人」の違いに関する説明が見当たらない。

一方、建石 (2009) は、(15) の「三大成人病の二つ」を「数詞+N+の+数量詞」という形として判断しているが、「成人病」は確かに「N」と見なせるものの、「三大」は数詞とすることができないと考える。あるいは、「三」は数詞と解釈できるものの、「大成人病」は単なる「N」とは言えない。また、(13) の「財産のひとつ／ひとつの財産」について、建石 (2009 : 55) は「意味に大きな差がない」と述べているが、実際には「…恐怖だって財産のひとつ…」の「財産」には複数の種類が存在し、その中の一つとして「恐怖」が位置付けられることから、部分数量を表していると考えられる。しかし、「…恐怖だってひとつの財産…」の場合は、「ひとつの財産」が独立した存在として捉えられ、一つのまとまったものとして認識される。このように、恐怖が何らかの価値や意味を有する点は共通するものの、言語表現としては上記の差異が見られる。

坂本 (2016) の議論における問題点としては、連体修飾成分がどの要素を修飾しているのかについての区別が不十分なまま、文の関係が判断されている点が挙げられる。(16) (17) に対し、管見では「この作品がもたらした」が「一つ」を修飾しているのではなく、「一つの奇跡」が修飾される前にすでに一まとまりとなっていると考えられる。そのため、連体修飾成分が修飾する対象は「一つの奇跡」であり、一方で、「奇跡の一つ」の場合には連体修飾成分が「奇跡」のみを修飾することとなる。この場合、修飾対象は最終的に「奇跡」となる。連体修飾成分を取り除くと、「一つの奇跡」が自然である理由として、「雪平夏美に会えたこと」は単一の出来事として定められており、発話者が数量詞を用いて発話する際に、すでに認知している数量をもとにした発話でないと矛盾となる。すなわち、出来事の数量が限定されているため、離散的単位「奇跡の一つ」との共起は文脈上の矛盾を生じさせる。このように考察すると、「一つ+の+NP」が聞き手の発話解釈においてNPを非限定的に解釈するよう指示する機能を担っているのではなく、主語名詞句によりNPの数量が限定されていることを聞き手に示す機能を有していると推測される。つまり、「一つ+の+NP」において、「一つ」は主語名詞句の数量を追跡し、「NP」は主語名詞

句の内容を指示していると推測される。このため、(18) のように主語名詞句の数量が変われば、それに応じて NP を修飾する数量詞も変化することが予想される。

- (18) 雪平夏美に会えたことと、一緒に旅行に行けたことは、(私にとって) 二つの奇跡だと思っています。

以上の問題点を踏まえ、本論では主に連体数量詞と連用数量詞を対象とし、それらの指示性の違いについて議論を行う。

3.5 既定的単位と未定の単位 (加藤 2003)

本論で用いる既定的単位、未定の単位という概念に関して、加藤 (2003) を援用する。加藤 (2003 : 456) では、「有機的関連のある集合と捉える認知の仕方」を「集合的認知」、「有機的関連性を持たない複数の存在と見る捉え方」を「離散的認知」としている。

- (19) 【青果店に行くと、「リンゴ 2 個 300 円」「リンゴ 5 個 600 円」のようにパックされてリンゴが売られている】「5 個のリンゴがほしいんですが」 (加藤 2003 : 455)

加藤 (2003) によると、店の人と客が「5 個のリンゴ」(まとまりのあるもの) という存在を知識として共有しているため、この状況において客は連体数量詞を用いることができる。「集合的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位と見なすだけの根拠が共有知識に存在しなければならず、その根拠が共有知識にないときには、根拠が提示しなければならない」と記述されている (加藤 2003 : 456)。そして、(20) のように、「一人」という表現が集合的とは言い難いことが指摘されている。加藤 (2003 : 466) は「「一人の学生」「三冊の辞書」のような連体数量詞が、その名詞句を指示する時点で、すでにその数量が一つのまとまりある単位であるという認識があると説明可能である」という理由で、既定的単位という用語を提案している。これに対し、離散的な認知を示すものを「未定の単位」として区別している。しかし、(20) の前後に (21) および (22) のような形式的文脈を加えることで、連体数量詞は既定的単位として解釈される場合もある。一方で、「老人」は前後の文脈によりすでに特定されているため、未定の単位を表す連用数量詞「老人が一人」を用いると、文として不自然になる。このことは、既定的単位を表す連体数量詞が、話し手と聞き手の双方によって同時に認識される必要があるため、成立しにくいことを示している。すなわち、既定的単位においては語用論的制約が存在し、そのため文脈による解釈が求められることが一般的である。一方で、未定の単位においてはそのような語用論的制約は存在しない。この対立は語用論的制約の有無に基づくものであると推測される。

- (20) 私は、小さな喫茶店に入った。カウンターで、{一人の老人が／老人が一人} コーヒーを飲んでいた。 (加藤 2003 : 464)
- (21) 私は小さな喫茶店に入り、その店のカフェオレが美味しくて、疲れた日にはいつもそれを注文する。なぜか分からないが、店にいるといつも同じ老人を見かける。その老人はいつも静かに外を眺めながらコーヒーを飲んでいる。しかし、今日はカウンターに座って、{一人の老人が／*老人が一人} コーヒーを飲んでいて。
- (22) 私は、小さな喫茶店に入った。カウンターで、{一人の老人が／*老人が一人} コー

ヒーを飲んでいた。彼女は私がこの喫茶店に訪れるたびに必ず見かける常連客だった。
その姿を見ると、何だか安心するような気持ちになる。

4. 分析

本節では、連体数量詞文と連用数量詞文における数量詞の指示性の違いを検討する。その後、指示詞と結びついた数量詞の指示性の解釈にどのような変化が生じるかを考察する。これらの検討を通じ、数量詞が指示性を持つ条件について明らかにすることを目指す。

4.1 連体数量詞と連用数量詞の指示性の違い

この節では、連体数量詞文と連用数量詞文における数量詞の指示性について述べ、そして、数量詞の指示が文脈によって変化する可能性について検討する。

(23) 二人の講師が、漫画を活用した街づくりなどについて話します。

(『地域新聞ふりっぱー』西区・手稲区版9月 2024. Vol. 229)

(24) [?]講師が二人、漫画を活用した街づくりなどについて話します。

(23) は『地域新聞ふりっぱー』西区・手稲区版(9月)に掲載された記事のタイトルである。このタイトルの左側にはイベント情報や講師の詳細情報が記載されている。雑誌という媒体での掲載であることから、「二人の講師」がだれのことを指しているか、書き手がすでに知っているかと推定され、既定的単位である。既知されているからこそ、連体数量詞が用いられると考えられる。仮に補足内容がなければ、このタイトルが不自然だと思われる可能性が大きい。つまり、読み手がタイトルだけを読むと、「二人の講師」がだれを指しているのかわからない。そうすると、次に続く説明を読んで初めて指示対象を認識することになる。このように、数量詞「二人」は後続の文脈から指示対象を明示し、指示性を持っていると判断できる。

(24) は複数の講師の中から任意の二人を指すように解釈される。情報シェアを中心とする新聞誌は講師が決まらない上で情報発信することができるが、読者に対して不信感を抱かせる場合があると考えられる。つまり、既知の情報を扱う場合、連体数量詞を使用することで信頼性が向上する一方、連用数量詞では指示性が不十分であるため、誤解が生じる可能性がある。

(25) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、二台のパソコンが突然故障した。

(26) 私の研究室にはパソコンが二台ある。*今朝、パソコンが二台突然故障した。

(加藤 2003 : 454)

加藤(2003)によれば、この文の「パソコン」は実質的には定名詞句になっており、不定を表す連用数量詞のほうが不自然である。指示性の観点から考えると、「パソコンが二台ある」は不定を表し、(25)の連体数量詞「二台のパソコン」が前文にある「二台」を指示することで、「パソコン(が二台)」が定となる。つまり、連用数量詞の「パソコンが二台ある」の「パソコン」が最初は不定だったが、後ろにある形式的文脈の影響を受けて特定され、定であると解釈できる。一方で、(26)の後続文の「二台」は不定のままであるため、前文にあるパソコンを指示しにくくなる。つまり、既定的なものは指示性を持つが、未定的なものは指示性を持ちにくいと言える。しかし、連体数量詞が常に指示性を持ちながら自然となるとは限らない。例えば、以下の例である。

- (27) ??今学期の中国語 I のクラスに二人の花子がいます。
(28) 今学期の中国語 I のクラスに花子が二人います。

新しい情報を聞き手に伝える際に、連体数量詞は不自然である。話し手にとって「二人の花子」が存在することは既知情報であるが、聞き手にとっては初めて聞く情報だからである。すなわち、聞き手が「二人の花子」に対して「既定的単位としての認知（加藤 2003：466）」をしておらず、話し手の認知と聞き手の認知にずれが生じるため、指示性を持つ連体数量詞の使用が不自然となる。したがって、話し手と聞き手の間に共有知識がない場合には、指示性を持たない連用数量詞が適切である。なお、連体数量詞文の後ろに文脈を加えることで、不自然さが軽減される場合もある。

- (29) 今学期の中国語 I のクラスには二人の花子がいます。一人は佐藤花子で、もう一人は鈴木花子です。名字が同じため、最初はどちらがどちらなのか区別がつきにくかったのですが、次第にそれぞれの個性が明確になり、違いがわかるようになりました。二人はクラスの中でよく一緒に行動しており、その息の合った連携はまるでよく練習されたチームのように完璧で、周囲を驚かせることもあります。
(30) 今学期の中国語 I のクラスには花子が二人います。一人は佐藤花子で、もう一人は鈴木花子です…

指示物を後ろにある文脈から照応する (29) は自然な文と見なす。これは「一人は佐藤花子で、もう一人は鈴木花子です」という部分が連体数量詞「二人の花子」の根拠となっているからである。これに対し、本来自然である連用数量詞文の後ろに同じ文脈を加えても、文の自然さが変わらない。逆に、文脈を提示することで「二人」の照応的機能が働き、一定の指示性を持つようになる。つまり、連用数量詞文「花子が二人います」の「二人」は「佐藤花子」と「鈴木花子」を指し示している。しかし、この場合では両文の意味が全く同様であるわけではなく、(30) は「花子」という存在に焦点が当たり、(29) は「二人いる」というところに強調がされている印象を受けるだろう。

このように、連体数量詞文においては、数量詞が一つのまとまった単位（既定的単位）として認知されるため、指示性を持ちやすいと考えられる。一方、連用数量詞文においては、数量詞が離散的に認知される（未定的単位）ため、指示性を持ちにくいと推測される。ただし、上述のように、前後に文脈を加えることで、数量詞の指示性に対する解釈が変化する場合もある。

4.2 指示詞が付く連体数量詞と連用数量詞の違い

日常生活において、以下の (31) (32) のように数量詞の前に指示詞を付ける使用が多く見られる。本論は、指示詞を加えることで、連体数量詞の指示性を強めることができると考える。なお、指示詞「この・その・あの」の違いについてここでは議論しないこととする。

- (31) この 6 枚のカードの置き方は全部で何通りあるか？
(32) (流転の後主人公が船に乗って大陸を去るシーン)

それにしても、あとにした中国大陆には、日清戦争以来、どれほどの中国人と日本人の血が流されてきたのでしょうか。なぜ、日本人は中国人と手を結んで仲良くしようとはしなかったのでしょうか…。

私には慧生と嫣生という二人の娘がいます。その二人には中国と日本の血が流れています。私は日本に帰ってこの二人の娘をしっかりと育てていこうと決意しました。⁴

(流転) (岩田 2013 : 145)

岩田 (2013 : 146) によれば、数量詞の前に指示詞を付けると、「指示物を取り立てて個性性を高める機能」が作用するようである。そうすると、「この二人の娘」の「二人の娘」も前文にある「慧生と嫣生」のことを指し示し、指示詞「この」を付けることで、指示物を取り立てていると考えられる。本稿の考えから見ると、連体数量詞「二人の娘」は前文の文脈を受けているため、すでに指示性を持っていると解釈できる。指示詞「この」を通じて、数量詞の指示性を強めていると言える。つまり、連体数量詞の前に指示詞を付けることができるということである。なお、岩田 (2013) は指示性に関しては特に言及していない。また、買い物する際に、以下のような会話をよく耳にする。

(33) 【八百屋での買い物】

客 : すみません、その二個のリンゴをください。

店員 : かしこまりました。こちらのリンゴですね。

客 : はい、それです。

店員 : ありがとうございます。お値段は二つで〇〇円になります。

客 : わかりました。お願いします。

店員 : ありがとうございます。それでは、お会計をどうぞ。

周知の通り、現場指示を表す際に、指示詞が用いられることは一般的であり、ものを指で示しながら発話するパターンが多く見られる。(33) はその一例と考えられる。この場面では、いきなり客から声をかけられる店員の状況が想定されやすい。加藤 (2003 : 455) の解釈で言うと、たとえば「二個のリンゴをください。」という連体数量詞を突然使用した場合、店員が発話者の意図を即座に理解できず、聞き返すことがある。しかし、(33) のように「この」が用いられても、店員は「こちらのリンゴですね。」と確認することで客と意思疎通を図ろうとしている。これは、商売において情報の誤りを防ぐため、どのような場合でも確認を行う必要があるという店員側の意識によるものも考えられる。この会話から捉えられるのは、連体数量詞の前に指示詞を付加しても、話し手と聞き手の認識に齟齬が生じる可能性がある。また、このことから、発話状況によって話し手と聞き手が指示性に対して異なる認識を持つことがあると考えられる。なお、これに関しては、さらなる検証が必要である。

以上のように、連体数量詞の前に指示詞を付加することで、数量詞の指示性が強まることが確認できる。次に、連用数量詞の例について検討する。

(34) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、その二台のパソコンが突然故障した。

(35) 私の研究室にはパソコンが二台ある。*今朝、そのパソコンが二台突然故障した。

(加藤 2003 : 455)

⁴ 岩田 (2013) では、下線部である「その二人」について言及しているが、「この二人の娘」については一切触れていない。本稿は連体数量詞を考察するため、後者に下線を引くことにする。

- (36) 私の研究室にはパソコンが二台ある。*今朝、パソコンがその二台突然故障した。

「その」を付けると連体数量詞文はずっと自然になる。しかし、連用数量詞文は不適格なままである。」と加藤（2003：454）で指摘されているが、その理由については触れられていない。本論の考えによると、(34)の「二台のパソコン」は集合的認知を表し、「二台」を通じて前文のパソコンを追跡し、一定の指示性を持つ。照応機能を持つ「その」と同時に用いられると、連体数量詞の指示性が強まることがある。一方で、(35)の「そのパソコン」は定名詞句となっているが、「二台」が一つにまとまっていない離散的認知であるため、文としては矛盾となる。さらに、「パソコン」は実質的に定となり、「その」を通じて前文に現れたパソコンを照応できるが、連用数量詞「二台」を通じて照応しにくいと考えられる。よって、(35)の連用数量詞は指示性を持たず、(36)のような文も成立しない。この問題について、以下の例を用いて説明する。

- (37) その3体の雪だるまを作った。

- (38) *雪だるまをその3体作った。

先述のように、連体数量詞は集合的認知を表すことから、数量詞が指示性を持ちやすい。指示詞「その」を前接させることで、指示性を付与することができる。構造上から言うと、名詞の前に指示詞を付ける(38)は認められるはずである。しかし、連用数量詞の前には指示詞が付けられない。この現象は品詞の問題と関連していると考えられる。本来単独の「3体」は名詞であるが、連用数量詞文では「3体」の名詞性が弱まり、副詞的な性質が強くなる。このため、連用数量詞が副詞的に機能している場合、その前に指示詞を置くことは文法的に認められない。また、意味上から見ると、「雪だるまをその3体」の「その3体」が指示性を持っているとしても、雪だるまが不定名詞句であるため、どの3体を指しているのかが明確でない。よって、連用数量詞文において、数量詞の前に指示詞を付けることが難しい。しかし、(38)を以下のように書き換えることが可能である。

- (39) 雪だるまはその3体だけ作った。

一見すると、「だけ」を挿入することで、連用数量詞の前に指示詞を付けることが可能になるように思われる。しかし、実際にはここでの「だけ」は単なる副助詞として機能しているのではなく、「だけを」として機能している。つまり、完全な文としては、「雪だるまはその3体だけを作った。」という文となる。構造上、「その3体だけを」は項として機能している。このことから、(39)は連用修飾として解釈することができず、厳密には連用数量詞文とは言えない。また、(38)を以下の(40)のように変えられるが、(41)のようには変えられない。なお、(41)が非文となる理由は、二重対格制約が適用されているためであると考えられるが、これに関しては、今後詳しく論じたい。

- (40) 雪だるまはその3体を作った。

- (41) *雪だるまをその3体を作った。

以上から、数量詞が指示性を持つ条件として、連体数量詞の場合、聞き手と話し手が同時に既定的単位であることを認識する必要があると考えられる。そして、品詞上から見ると、連体数量

詞の前に指示詞が付けられることは一般的であるが、連用数量詞は副詞の性質が強いため、通常は指示詞を付けることができない。

5. まとめと今後の課題

本論では、従来指摘されていなかった数量詞の指示性に着目し、指示性の定義を明確にした上で、連体数量詞文と連用数量詞文における数量詞の指示性の違いを考察した。その結果、連体数量詞文における数量詞が本来一定の指示性を有し、既定的単位として指示詞と結びつきやすい。対照的に、連用数量詞文における数量詞は離散的認知を表し、指示詞を介して指示性を付与しにくいという原則が明らかとなった。すなわち、日本語の数量詞が指示性を持つための条件は、既定的単位として認識される連体数量詞であることにある。

また、指示詞を付けることで、連体数量詞の指示性を強めることができるということが確認された。しかし、数量詞に指示詞「この・その・あの」を付けた場合の違いについては、十分に議論するには至らなかった。今後の課題として、数量詞の指示機能を検討した上で、指示詞（この・その・あの）が付く数量詞の違いを考察する。

参考文献

- 岩田一成 (2005) 「日本語数量詞の代名詞的用法」『自然言語への理論的アプローチ—意味編—』大阪大学大学院言語文化研究科、pp.11-18.
- 岩田一成 (2006) 「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」『日本語文法』6巻1号、pp.38-55.
- 岩田一成 (2013) 『日本語数量詞の諸相：数量詞は数を表すコトバか』くろしお出版.
- 庵功雄 (2019) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房.
- 加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26号、pp.31-64.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 坂本智香 (2016) 「[一つ+の+NP] と [NP+の+一つ] 一名詞文の述語名詞句での用法に関する考察一」『名詞類の文法』くろしお出版、pp.41-60.
- 建石始 (2009) 「非指示的名詞句における数詞「一」の独自性」鹿児島県立短期大学人文学会（編）『人文』33号、pp.49-59.
- 張琴琴 (2024) 「現代日本語における数量詞の種類について」『北海道大学大学院文学部研究論集』第23号、pp.283-302.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- 福田嘉一郎 (2016) 「主題に現れうる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈」『名詞類の文法』くろしお出版、pp.167-184.

【付記】

本稿は、第十五届漢日対比語言学研討会（2024年8月26日、於：上海建橋学院）における口頭発表の内容を加筆修正したものです。発表の席上でご助言を賜りました先生方に御礼申し上げます。そして、指導教員の加藤重広先生および査読を担当してくださった匿名の2名の先生方からは大変貴重なコメントをいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。なお、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。

(チョウ キンキン・北海道大学言語科学研究室・博士後期課程)